

会員近況



日本ゼオン(株)総合企画本部 小山 明茂

私がORにはじめて接したのは昭和29年で、大学の講義の中でした。テキストはモースとキンボルの「オペレーション・リサーチの方法」で、表紙には保安庁保安局調査課(発行)と印刷してあったのが、強く印象に残っています。以来ORとは何となく離れられない縁となつて、今日にいたっております。

会社へ入ってからは、研究部門、工場生産管理・技術部門、コンピュータ部門を経て、現在は企画部門に所属していますが、いろいろの場面でORは役に立ってきたと思っています。前著に「ORは執行部(軍の司令部、産業の副社長、行政活動の長)に仕えるものであることを明記しておく。執行部がOR-GROUPを適切に用いるというのは、相互に他の活動を信頼し、他の人の権限に敬意をはらっていることが必要である。」と書かれているが、ORが役に立つかどうかは、このことを組織のなかにいる人々が理解できているかどうかによると思います。

OLD-OR-WORKERとしては、古典を懐旧するだけではスクラップになるので、昨今は奥野先生の「情報化時代の経営分析」と、小林先生の「数量化理論入門」を本誌とともに机上に積んで頭の老化防止につとめております。

ソニー株式会社 高橋 睦夫

ORに対して私は大学時代から1つの考えをもっていました。それは、「真のORは企業の実用化に十分耐えられなければならない」というものです。ORは一般数学とは異なり、現実の問題を対象にすることが可能であります。現在、私も企業の一員として、生産計画に携わり、将来の予測も含めての工数計算や自動機の導入台数決定を行なっておりますが、その過程で言えることは(当然、順序だった論理的思考は要求されますが)いかに立派なORの手法やむずかしい数式で解析を行なっても、それはあまり他にはアピールする力が少ない。むしろ、ORの知識のない人や、忙しいトップの方々にも理解しても

らうためには、論文の中で“猛威をふるう”数式よりもひと目見てわかる図表やグラフのほうが表現方法としてはベターであり説得力があり、かつ効果的であるということです。最近はそのようでもなくなったと思いますが、ともすれば、ORの論文は結論までの過程や解析手法、数式展開が重視され、かんじんな(企業人にとって最も関心のある)結論や今後の方向にもう1つ物足りなさを感じたり、数ページの難解な内容の結論も図表化すると1枚で終わってしまうものも見るがあります。しかし、これもORの一面であり、ORに対する要求度や考え方の違いだけであり、その根底に流れる思想は同じものであると信じます。理論の追求と応用の追求が今後も互いに刺激しあいながら、ORの発展に貢献していくことを願っております。

文教大学情報学部経営情報学科 広内 哲夫

私は現在、OR学会の2つの研究部会、「創造性開発の数学モデルとコンピュータ・ベースド・デザイン(CBD)」および「デンジョン・サポート・システム(DSS)」に参加させていただいております。CBDは計算機システムにいかにか創造的能力を付与するかが研究のテーマであり、DSSは経営管理に携わる管理者の創造的な意思決定能力を高めるための経営情報システムをいかにか構築したらよいかを現実的な目標となります。

両システムとも、強力なマン・マシン・システムの確立を旨とすわけですが、CBDの研究はマシンに付与する創造性のアルゴリズムに、DSSの研究はマンが創造的主体性を発揮できるような枠組の確立に、それぞれ研究の重点がおかれています。極論すれば、CBDはマシン指向の研究、DSSはマン指向の研究といえるでしょう。

両研究部会に参加した初期の頃は、同じ創造性を取り扱う研究でありながら、それぞれの部会の研究方針の相違に困惑しました。

しかし、最近、認知科学や知識工学とよばれる新しい分野で、人間の創造的問題解決能力(マン)をコンピュータ(マシン)に移す方法論が研究されており、それが医療の診断の領域でプロダクション・システムという名で成果が実っていることを知りました。これこそ、私の夢に描いていた知的システムです。

今後は、CBDとDSSの研究部会の成果を知識工学の手法を用いて融合し、経営管理の分野でのプロダクション・システムを実現したいと思います。

最近、社会システムのモデリングと意思決定問題に興味をもち研究を行なっています。このような問題の中でORの位置づけは、モデリングの一手段、評価の一手段として重要な役割を担っていると言えるのではないのでしょうか。にもかかわらず、現実の問題に対してORは役に立たないという声をよく耳にしますが、数学的にきれいに定式化されたORが、現実問題のもつ不確実さ、

不正確さに柔軟に対処できないことが大きな原因の1つになっているのではないかと思います。

Decision making の分野で展開されている Fuzzy theory をベースにした多様なアプローチが、役に立つORに対する1つの方向かも知れません。しかしながらそれ以上に、ORを利用する人が、現実問題とORとをいかに結合させるかというインタフェースに芸術的センスを養うことが重要ではないかと自分自身の反省から感じている次第です。このためには結局のところ、現実問題とORに精通することしかないのかも知れません。

会合記録

- () 内は出席者人数
- IAOR委員会 2月1日(月)(1)
- 編集委員会(OR誌) 2月3日(水)(11)
- 表彰委員会 2月4日(木)(4)
- モニター委員会 2月5日(金)(2)
- 文献賞小委員会 2月17日(水)(7)
- 研究普及委員会 2月26日(金)(13)
- 主査会議 2月26日(金)(13)
- 庶務幹事会 2月26日(金)(4)
- 25周年記念事業委員会

- 長期計画委員会 2月2日(火)(4)
- " 2月15日(月)(5)
- OR史委員会 2月15日(月)(2)

入退会

●57年度から入会 (正会員)

- 青山 貞一 (社)科学技術と経済の会
- 有賀 正弘 日本航空(株)
- 岡田 英明 協和醸酵工業(株)
- 岡田 修 小西六写真工業(株)
- 大浦 祐而 日本電信電話公社
- 亀山 喜正 岡山大学

- 河野 実 防衛庁
- 香西 泰 東京工業大学
- 田中 康信 清水建設(株)
- 千歳 壽一 東京都
- 殿岡 元治 日本技術貿易(株)
- 豊田 徹 日本電信電話公社
- 山崎 了三 いすゞ自動車(株)
- 張 享一 明知實業専門大学
- 高梨 敬子 (財)計量計画研究所
- 沢村 淑郎 日本アイ・ビー・エム(株)
- (学生会員)
- 橋本 克之 早稲田大学
- (賛助会員)
- (株)フジミック

編集後記▶桜前線も日一日と北上し、はや4月。新入社員、新入生が会社、学校に溢れ、フレッシュさに満ちています。毎年のことながら、明るいきもちにしてくれる4月です。年初以来、内外共に暗いニュースが続くなかで一時でも和やかな気分にはさせてくれます。▶今月の特集は「商用データベース」。企業内データベースのみではなく、各記事に紹介されているような多くの商用データベースが動いています。この背景にはマイコン、ネットワークをはじめとするコンピュータ技術の驚くべき進歩があります。国際ネットワークを利用してアメリカのデ

ータベースを利用できる国際情報システムの時代です。また、人工知能分野の蓄積を活かしたソフトウェアの発達により人間の思考形態に近い知識ベースも実用化の一手手前までできています。ただ一言、難を言わせていただければ、利用コストが個人で利用できるほど十分安くないことです。編集子のような所得階層でも利用できる程度のコストになることを期待します。▶高岩氏の「テクノロジートランスファー奮戦記」は従来のOR誌にはない新形式のものです。ORの活用場の生々しさが伝わる興味ある読物です。(M)

オペレーションズ・リサーチ

昭和57年4月号 第27巻 (新シリーズ第7巻) 4号 通巻256号
 代表者 松田 武彦
 発行所 社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル
 (電話 03-815-3351~2) 〒113
 編集人 小林 竜一
 発売所 株式会社 日科技連出版社
 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-2 〒151

本誌のご注文は直接

日本オペレーションズ・リサーチ学会へ 定価 850円 (郵送料含) 年間予約購読料 9600円 (郵送料含)
 本誌への広告お申し込みは明報社 (571-2548)、日経弘報社 (583-2241) へ